

〔有德院殿御實紀附錄十五〕元文のころ、長崎の工人太郎左衛門といへる者に、大なる自鳴鐘をつくりせらる。其製はなはだ巨大にして、一年に一度と、のふる時は、終年たがふる事なしといへり、いとめづらかなるものとみな稱讚せり、ある日河合久圓成盈に、汝かの自鳴の價はしれりやと仰ありしかば、いまだしり侍らずと申けるに、かれは金一萬兩を費したり、何の詮もなく、邪魔なるもののかとてわらはせ玉ひしとぞ、いかなる盛慮にや、久圓にはうかゞひしられざりしかたりき。

〔寛政曆書二十三〕垂搖球儀

昔黃帝創觀漏水、製器取則、以分晝夜、是用儀器測時刻之始也。於周則挈壺氏司之、自是以來世々相沿、迄于宋元、其制頗廣大。若蓮華漏、燈漏之類、不可勝數也。夫辨時刻者、測象家之先務也、必不遺於此。則不能辨諸曜之運動、然而漏水甚難得真矣。何則、水情隨寒暑有遲疾、因清濁有漂瀾、作者往々困焉。是以有浮漏、下漏輪、漏權衡之制、巧作雖萬方、而遂不能免水差云。至于明季、西人始傳自鳴鐘者、與漏刻並行、至于清、用西法之垂線球儀。儀象志曰、釘隱一銅軸於梁上、要至平、其半繫垂線球、其球隨本橫軸而往來、其用法、手握垂球、不急不緩、任意離之于頂線、乃釋手放之、則其球自往來、其往來之圈線、短小如將盡、即又提球而放之令往來、一日相繼、以定時刻分秒之準則焉。但初放之時、其圈弧不可大過、大略四十五度之内、其提放之度、各有定規、使學者習而熟之、此法一出、而凡時刻之秒餘、天行之微差、無不可悉矣。謹考天智天皇十年夏四月丁卯朔辛卯置漏刻於新臺、始打候時動鐘鼓、始用漏刻、此漏刻者、天皇爲皇太子時、始親所製造也。永祿慶長之際、洋舶齋貢自鳴鐘、我之有自鳴鐘實始于茲、及其制漸盛也、以俗間不用平時、故工人更加巧、以報晝夜之長短、是以測量家不敢用、其無鐘者曰授時簡、寶曆之試測、取以兼用於漏刻、尋而長秀省自鳴之巧、平諸輪之行、專主實用、名萬分規、於是測數漸得密、明和以降、測家往々熟於垂線球之法、用之交食凌犯、寛政初、麻田安彰、發明垂搖球儀而創製之、但